

惠心教學に於ける眞如種子の問題

八 木 吳 惠

此の問題は惠心教學の佛性論として注意せられる。即ち印度以來の懸案たる『瑜伽論』五十二の眞如所緣緣種子を契機とし、種宗たる法相の法爾無漏種子説に對して一乘思想の立場たる眞如種子説を歴史的に完成し、これを性宗たる天台本然の立場に還元して本有佛性の遍滿を定立し、更に其の開覺修顯を彌陀思想西方願生へと連絡づけた點に特色がある。其の史的展開は初唐の法寶對慧沼の論諍に直接し、わが平安初期の傳教對德一の論諍に於て考慮せられる。

惠心教學の種子説は『一乘要決』大文第六遮無性有情執と大文第七辨佛性差別とに集約せられる。即ち法相の法爾無漏種子を斥けて無性有情を否定し、眞如所緣緣種子を眞如種子として定立し、一轉して悉有佛性の「性」の概念に置換し、大文第四引一切衆生有性成佛文における法寶を豫想せる寶公三番佛性に依つて眞如種子を論定し、最後に天台の三因佛性を擧げて繰りの種子、性得の三因の種子を説き、眞如・種子・佛性の概念を融合するのである。

別して眞如所緣緣種子を説明しよう。『瑜伽論』五十二の本文に就いて、惠心は法寶を契機として印度の護法・難陀兩系（護法系は、眞如を緣ずる智種とし、難陀系は聞熏習種とす）を考慮し、法寶が兩論師の釋を否定して眞如を種子と名ける説を擧げ、「山家」として傳教の『守護章』（下之中）を引き印度以來の傳統的解釋の集成を

示す。注意すべきは德一の難として、もし眞如を種子として諸法を生ずとせば『瑜伽論』に眞如種子の成語あるべく、眞如所緣緣種子の語は不當ならんとするに對し、傳教は「此亦不爾。眞如即所緣緣待聞熏等」出世法生。謂不眞如不待緣出世法生」として依然眞如所緣緣種子の語で應ずるのみ。所が惠心の『一乘要決』に來ると、「沼公又難云」として慧沼の『慧日論』二における德一と同一の問難を擧げ、答文には傳教と異つて『瑜伽論』八十の「眞如種性・眞如種子」の成語を掲げ、眞如所緣緣種子を眞如種子と解する法寶・傳教の傳統を『瑜伽論』自體における語の發見によつて裏附けたのである。これは惠心の功績として、常盤博士が特筆せる所である（『佛性の研究』）。但し『瑜伽論』自體の「眞如種子」は必ずしも一乘的概念には一致せずして如實の種子の義と考へられるが、支那・日本と經過せる教學史的展開における場合、法相教學が眞如は無爲法で種子に非ずと立論するに對して「眞如種子」の成語で應ぜる點は多とすべきである。更に私は傳統を重んずる惠心の用語例を檢索して、『一乘要決』所引の『守護章』（下之中）に『金剛三昧經』の「眞如種子」の語がある事、安然の『教時義』一に此の經文と『瑜伽論』の眞如所緣緣種子とを照合せしめて居る事、三論宗元興寺宗法師の『一乘佛性慧日抄』にも三論宗の眞如種子説の所依として傳教所引の今經文を示す事を勸案せしめられたのである。

惠心における眞如種子の概念は、『瑜伽論』八十と五十二との兩文處に據つて成立する。即ち、『瑜伽論』八十自體に依る時、眞如種子は因縁で法爾である。又『論』五十二を考慮する時、眞如所緣緣種子を眞如種子とすれば所緣緣で相分で法爾であり、同時に無漏智種子は了因で見分であるが法爾ではない。即ち、眞如は出世法を生

ずる（『論』八十）が、更に獨りそのみでなく、この眞如を觀する時に生ずる能縁の智慧も種子であるが、この智種は法爾種子ではない。かくて此の能縁の智が種子と呼ばれる時、この智に對する相分の眞如を所縁縁と云ひ、その體も種子であるとする。このやうに惠心は法相教學における無漏智種を本有法爾とする事を否定するけれども、眞如所縁縁種子の解釋に於ては、唯識家がこれを眞如を所縁縁とする無漏智種子とする點を採つてこれを法實以下の眞如即種子とする點に合して、見相二分の配釋で解決せんとする所に惠心の綜合的態度が見られると思ふ。尙、眞如種子説への非難は法實に對する慧沼によつてなされた（『一乘要決』に『慧日論の四難をあげて「以上は實の義を難ず」と細註する）。惠心はこの慧沼の四難（一、前後相違、二、聖教相違、三、自宗相違、四、進退有違）を逐條答釋する。特に第二聖教相違の過に於て、慧沼が眞如種子は利那滅の義に違つとし、自宗の法爾本有種子は熏生せざれば違せずと辯ぜるに對し、「山家云」として『守護章』を引いて『金剛三昧經』、『涅槃經』で應ずる。これを補足するものが先きの眞如所縁縁種子の項で、種子六義はたゞ有爲客性を説くのみで本性本有に關せずとする惠心の文である。常經博士が特筆大書して宗法師の義によるものとし、從來指示する事なき本有種子への疑難追求とするが、私は法實の『一乘佛性權實論』（金澤文庫所藏古寫本）破法爾五性章に「若以眞如二故不得名種子、何故涅槃經說第一義空爲種子耶。若以違種子六義利那滅等」故不得名種者、六義種子説其客性非本性也」とある一文を發見したので、惠心は法實に直接し、宗法師は、よし參照あるも傍らなるものと見たいのである。

惠心における眞如種子説は『往生要集』との連絡に於て宗教的あ

り方を示す。有漏種の轉成を氷水の譬で認める事は『要集』作願門の同文に直結する。天台に於ける因・種の概念（『法華玄義』における性得の種と修得の因）によつて、「種」の立場での眞如種子は、「性」の立場で本有佛性の修顯、有漏種子の轉成による成佛の因性確立といふ實踐問題となる。しかも本有佛性の修顯開覺は、これを無性有情に迄下降せしめても、『要決』には、内に眞如の理と外に諸佛の力とによる漸々修學悉當成佛、二空眞如による發心修行を示すので（『觀心略要集』亦然り）、こゝに鈍根者への佛力増上に力點が存すると、彌陀佛への焦點設定となる事は惠心教學の特色から見て當然である。かくして、『要集』における本有佛性の各引文や、止惡修善章における智火の分無き吾人への佛の哀愍強調を考慮する時、俄然淨土教的色彩が加重せられ、『要集』における菩提の因としての信心強調を考慮せば信心佛性の問題に連結する。『要決』にも信心爲因、一闍提を信不具足とする事と彼此參照すべきであらう。

以上、この問題は、三一權實、佛性一般の諸問題を基盤とする純粹教學理論である。即ち、種子論としては眞如即種子の論を歴史的に定立しながら、これを性宗の立場に戻して本有佛性の遍滿を再確認し、約位の五性、無性有情への會通を施し、更に成佛論の基盤としては衆生と佛、煩惱と菩提との無別體を確立する。一轉して、成佛の因種として佛性開覺の現實的修顯ともなれば、自己機根への反省、闡提に准ずる現實相、煩惱の水を解くべき智火なき衆生に於ては彌陀佛力への聞信と迄展開する契機を孕み、かくして、惠心教學に於ける眞如種子の問題は純粹理論から宗教的實踐意義を露呈し來る事となるのである。